

「華夷訳語凡例」をめぐる覚書

中村雅之

1. 伝統表記と精密表記

元代から明代にかけて、モンゴル語の単語や文章を漢字音訳によって表記した資料が多く存在する。それらは『至元訳語』に代表される伝統的な表記と、『華夷訳語(甲種)』および『元朝秘史』の精密さを追求した革新的な表記とに大別できる。前者には『元典章』や『元史』などに見られるモンゴル語語彙も含まれる。

本稿では、精密な音訳法の解説と言うべき「華夷訳語凡例」を足掛かりとして、元明期の音訳作業に関するいくつかの問題を考えてみたい。目指すところは精密表記の成立過程の解明であるが、資料の制限があり、また筆者の能力の限界もあって全面的なものとは言えない。より詳細な解明は今後の研究に俟つとして、ここではこれまで論じられなかった問題についてやや大胆な仮説を提出してみたい。

2. 「^𑖅児(-r)」について

「凡例」は6項目からなる。その第1項は「q-γ-」に関するものであり、第2項は「r」についてである。

伝統表記で区別のなかったモンゴル語の「r」と「l」は、『華夷訳語』等の精密表記では完全に区別される。音節初頭の「l-」に対しては漢語にもよく似た音素が存在するため、それらの音素をもつ字を無標で「里(li)」「刺(la)」「魯(lu)」「侖(lun)」のように用いたが、「r-」に対しては対応する音素がなかったため、「^𑖅里(ri)」「^𑖅刺(ra)」「^𑖅魯(ru)」「^𑖅侖(run)」のように小字の「舌」を左肩に付す形で表記した。この「r」は「舌頭音」という用語で説明されている。「舌頭音」の例として最初に挙げられているのは「^𑖅児(-r)」であるが、これについては注意すべき点がある

まず、この表記が他の例とは異なり、音節末音の「-r」を示す表記であるということ。さらに、この「^𑖅児」という表記は実際には『華夷訳語』においてはほとんど用いられず、単に「児」と表記されるということである。

『華夷訳語』の本文を見慣れた者にとっては、「児」が音節末の「-r」を示すことは自明であり、それにわざわざ小字の「舌」を付すのは冗長な表記に感じられよう。しかし、伝統表記を参照すればその疑問はほぼ氷解する。『至元訳語』においては、「児」はモンゴル語の「-r」のみならず「-l」の表記にも用いられた。

例) 脚：闊児(文語 köl、華夷訳語・秘史「闊勒」)

襖子：迭児(文語 *debel* ~ *degel*、華夷訳語「迭^𑖅延」、秘史「迭額勒」)

したがって、伝統的な意識からすれば、単に「児」と表記したのでは「-l」である可能性を排除できないことになる。「^𑖅児」とすれば「-r」であることは明白になる。

『至元訳語』におけるような、「-r」と「-l」を区別しない「児」の用法が元代においてなんら特殊なものでなかったことは、『蒙古字韻』所載の「蒙古字韻総括変化之図」によって明らかである。吉池孝一(1996)によればこの図はモンゴル語の音節末音の解説であるが、そこではパスパ字「r」に対して「転舌児」、パスパ字「l」に対して「頂舌児」という説明が見える。つまり「r」は“転舌”の「児」であり、「l」は“頂舌”の「児」であるという。これは「児」が「-r」と「-l」の双方に対応してい

ることを前提としなければ理解できない。“転舌”は「舌を転がす」で、上述の「舌頭音」にあたるが、用語としては“転舌”の方が分かりやすい。“頂舌”は「凡例」の第4項にも見え、「舌を持ち上げる」意と解釈できる。

なお、『蒙古字韻』は清朝乾隆年間の写本が現存する唯一の伝本であるが、「蒙古字韻総括変化之図」は元代の版本にも同様に収められていたことがほぼ確認されている (cf. 吉池孝一 1993)。また、この図は「頂舌」という用語以外にも「凡例」の記述と共通する部分があり、『華夷訳語』等の精密な表記に関連する最も古い資料と見なしてよい。

『華夷訳語』本文において、「凡例」に見える「^舌児」がほとんど用いられないことについては、第7節で述べることにする。

3. 頂舌音 (-l)

第3項は音節末音の「-l」についてである。この音が「頂舌音」という用語で説明されていることは上に述べたが、その表記法は「^温」「^兀」「^豁」「^斡」のように一見風変わりである。「r」の表記に用いられた小字「舌」が「舌頭音（あるいは“転舌音”？）の「舌」であるように、ここでの小字「丁」は「頂舌音」の「頂」の略体と理解してよいであろう。すなわち、「^舌刺」が「刺」を「舌頭音として」（あるいは“舌を転がして”）読めという注記であるように、「^温」は「温」の音節末音を“頂舌音”として（つまり“舌を持ち上げて”）読めという注記である。

ここで「凡例」に挙げられた例のうち、「温」は漢語音では音節末音が「-n」であるのに対して、「兀」「豁」「斡」は末音がゼロである。それらを全て小字「丁」によって「-l」に読み替えるわけであるが、この奇妙さも伝統表記を参照すればある程度納得できる。

伝統表記では音節末音の「-l」を表すのに、近似音たる「-n」の漢字を充てる表記法が主流であったが、ほかにも数種の方法が用いられており、中には「-l」を全く無視する場合も珍しくなかった。

例) altan(金)：至元訳語「按弾」、華夷訳語「^温安壇」

kömlüdüge(馬のむながい)：至元訳語「庫木都魯哥」、秘史「可門勒都^舌児格」

mongyol(モンゴル)：「蒙古」（←元代に一般化した音訳）、華夷訳語「忙^温豁」

このような伝統表記を丸ごと取り込んだ上で、近似的に「-n」とされたり無視されたりした音節末音の「-l」を指示する簡潔な方法として「^温」「^兀」「^豁」「^斡」といった表記が考案されたのであろう。

伝統表記における音節末音「-l」の表記には、①近似的に「-n」で表す、②完全に無視して表記しない、③前後の母音に似た母音を付加して「刺」「里」「魯」などを用いる、④「児」を用いる、の4通りの方法が存在した。『華夷訳語』における精密表記では、これらのうち主に①と②に対して小字「丁」を添える方法を適用し、③については伝統表記をおおむね踏襲した。④については次節で論じる。

4. 小字「勒」

第4項も音節末音の「-l」についてである。ここでは「莫勒孫(mölsün)」のように小字の「勒」を右下に付す表記法が示されている。『元朝秘史』においては音節末音の「-l」は全てこの方式によっているが、『華夷訳語』ではむしろ前項の「丁」によ

る方式が主流であり、この「勒」を用いる方式は「丁」に比べればやや限られている。

それではなぜ、『華夷訳語』では「-l」を表すのに2種の方式が存在するのであろうか。上述のように伝統表記には「児」を用いて「-l」を示す表記法があったが、おそらく『華夷訳語』における小字「勒」は本来その「児」に対応するものとして考案されたと考えられる。(第2節に挙げた「闊児→闊勒」を参照せよ)

理論的には「児」の場合にも「^丁児」の形で「-l」を示すことはできたはずであるし、実際にそのような表記が検討された可能性も否定できないが、おそらくは「児」の漢語音の変化が原因で敬遠されるに至ったのであろう。元代には「児」の漢語音はパスパ字で「**ᠵ**(zi)」と記され、あたかも現代の「日」のような発音であったが、明代に入ると徐々に現代音とほぼ同様の音[aɪ]へと変化することになる。その音が「-l」を表すのに不相当と判断され、新たに「勒」が選ばれることになったと思われる。そして一旦この「勒」が用いられるや、明快で分かりやすい表記として使用範囲が徐々に広がり、『元朝秘史』では最終的に全面採用されることになった。

5. 「^丁温」 > 「温勒」について

本誌6号掲載の拙稿において、『元朝秘史』巻1・2では音節末音「-l」の表記をめぐって「^丁温」 > 「温勒」の改訂が行われたという小沢重男(1994)の説明を取り上げ、必ずしも改訂が行われたと考える必要がないとする私の立場を表明したが、これについてこの場で修正しておきたい。

ある人の指摘を受けて陳垣(1934)の記述を詳しく検討した結果、「-ul」を表す表記として「^丁温」 > 「温勒」の改訂はやはり行われたと考えるのが妥当である。陳氏の論拠は、(1)巻1第2節の総訳部分に「^下温」「^干温」の例が見えるテキストがあり、ともに「^丁温」の誤写と考えられること、(2)陳氏の得た永楽写本の秘史総訳において同じ個所に「^丁温」と見えること、(3)小字「勒」を脱記して「温」のみが記された例が少なくないこと、(4)小字「勒」が誤って「温」の次の字に付された例が見えること、などである。

陳氏の論拠の中では(1)が特に興味を引く。「パラディウス本」として知られる十五卷本の巻1第2節の総訳部分に「^下温」「^干温」と見えるものであるが、これは改訂の作業手順を如実に物語るものであろう。「^丁温」から「温勒」への改訂を行うには、まず「丁」を取り除くための抹消点を付け、それから小字「勒」を加えるわけであるが、抹消点の付された「丁」(=「下」)全体を一つの漢字として見誤った結果、「干」「下」と記してしまった。「丁」から一画増えて誤写されているのはそのためである。

「^丁温」 → 「^干温勒」 → 「温勒」 (=正しい改訂)

「^丁温」 → 「^干温()」 → 「温」 (=脱漏)

「^丁温」 → 「^干温()」 → 「^下温」「^干温」 (=誤写&脱漏)

なお、最近出た栗林均(2003)の「前書き」によれば、音節末音の「-l」の表記は『華夷訳語』においても同様に「丁」から「勒」へと改訂された部分があるという。

6. 音節末音の「必(-b)」

「凡例」の第5項、第6項は音節末音「-ɣ」「-d」「-g」「-b」に関するものである。いずれもわざわざ「不用読出(読み上げる必要はない)」と説明されているように、伝統表記ではこれらの音節末音は通常無視されて表記されない。

最後の第6項に「-b」を表す小字として「ト」と「必」が挙げられているが、実際には『華夷訳語』本文では「ト」を用い、「必」はほとんど用いられない。『元朝秘史』も同様である。ではなぜ「凡例」には「必(-b)」が挙げられているのか。これに関する解釈は少なくとも次の2つが可能である。

その1、『華夷訳語』では初め「必」も多く用いられていたが、改訂を経て「ト」に統一された。これについては、現行の『華夷訳語』が何らかの改訂を受けている可能性があることは上述の通りであるが、「ト」と「必」に関して改訂云々を論じるだけの材料は今のところない。

その2、「凡例」はそもそも『華夷訳語』のために作られたのではなく、『華夷訳語』以前にできていた。つまり『華夷訳語』以前には「必」も用いられたが、『華夷訳語』に至ってほぼ「ト」に一本化された。これについては『元史』が重要な示唆を与えてくれる。『元史』の中で、モンゴル語の「*tobčiyān*(要録・史籍)」にあたる語が「脱ト赤顔」「脱必赤顔」の二様に記されている。いずれも『元史』においては異例の表記といえる。なぜなら『元史』は全体として見ればモンゴル語の語彙を伝統表記に則って記すのが原則であり、伝統表記では通常「-b」の部分は表記されないからである。そして「-b」を「ト」「必」で記すのは、まさに「凡例」に示された精密表記の原則に沿うものであるが、『元史』が成ったのは洪武2年のことであり、『華夷訳語』の最終的な完成より20年ほど早い。つまり、「凡例」に示されたような精密表記の実質は『華夷訳語』よりもかなり早い時期から存在していたと考えねばならない。

7. 再び「^ㄹ児(-r)」について

第2節において述べたように、『華夷訳語』における音節末音の「-r」の表記としては「児」が通常のものであって、「凡例」に記された「^ㄹ児」はほとんど用いられない。つまり、「-b」における「必」の場合と同様に、「凡例」と本文との間に齟齬が見られる。

ここで伝統表記において「-r」と「-l」の双方に対応していた「児」がそれぞれどのように精密化されたかをまとめると以下ようになる。

「-r」：①「児」>②「^ㄹ児」>③「^ㄹ児」>④「児」

「-l」：①「児」>②「^ㄹ児」(?)>③「勒」>④「勒」

②の「^ㄹ児」が実際に用いられた証拠はないが、「蒙古字韻総括変化之図」の“転舌児”“頂舌児”を参照するならば、少なくとも‘ありうる表記’として検討された可能性は高い。もしも「^ㄹ児」が全く存在しなかったとすれば、「-r」に対してなぜ小字の「舌」を伴った「^ㄹ児」が存在するのか理解しにくい。①から直接④に移行すれば済んだはずである。

③で「勒(-l)」が現れたことを受けて、初めて④のように小字「舌」を伴わない「児」が「-r」専用の表記として存在しえたと考えるのが合理的である。したがって、精密表記としては「^ㄹ児」よりも「児」の方が新しい表記と見なされるべきである。(ただしこれは『華夷訳語』成立までの状況であり、『元朝秘史』における状況については別に検討する必要がある。)

『華夷訳語』の「凡例」と本文の齟齬については、「凡例」が③の段階を、『華夷訳語』本文が④の段階を反映していると思えることができる。ここでも「必(-b)」の場合と同様に「凡例」の内容が『華夷訳語』本文よりも早い段階のものであるという

結論が導き出されたことになる。

念のために、上で①>④>③の順序は考えられないのかを検討しておこう。つまり精密表記としても「児」より「^𠃉児」の方を新しい表記と見る立場であるが、その場合には『華夷訳語』本文において「児」と記されるものが、なぜ「凡例」で「^𠃉児」なのかということが説明できない。本文で改訂が行われていない部分について「凡例」のみが新たな表記を(最初の例示として!)掲げるとするのは全く意味をなさない。やはり「凡例」の実質的な成立は本文に先立つもので、精密化は上に示したように①>②>③>④の順序で進んだと考えるのが穏当である。現行の「凡例」は『華夷訳語』成立以前にすでに存在していた何らかの資料を流用したものということになる。

8. 精密表記の系譜

これまで断片的にふれてきた精密表記の関連資料をおおまかに時系列に沿って並べてみると、以下のようなになる。

①『蒙古字韻』所載「蒙古字韻総括变化之図」(元代初期～中期?)

↓

②「華夷訳語凡例」の実質的内容(元代中期～明代初期?)

↓

③『元史』中の「脱ト赤顔/脱必赤顔(tobčiyān)」(明洪武2年:1369年)

↓

④『華夷訳語』(明洪武22年:1389年)

↓

⑤『元朝秘史』(明洪武年間?)

想像を含む部分もあるが、見通しとして掲げておく。①から②へは「-g」を表す「克」、「-γ」を表す「黒」、そして「-l」を表す“頂舌”という用語が受け継がれた。②から③へは「-b」を表す「ト」「必」二様の表記が受け継がれた。④に至って「必」はほぼ消えた。⑤では「丁」が廃止され「勒」が全面的に採用された。

9. 付論:「忙^𠃉豁^𠃉倫^𠃉紐^𠃉察^𠃉脱^𠃉察^𠃉安(mongyol-un niyuča tobčiyān)」について

現行の『元朝秘史』の冒頭には、その漢語書名の下にモンゴル語書名(あるいは漢語書名のモンゴル語訳)として「忙^𠃉豁^𠃉倫^𠃉紐^𠃉察^𠃉脱^𠃉察^𠃉安」が記されている。このモンゴル語は「mongyol-un(モンゴルの) niyuča(隠れたる・秘密の) tobčiyān(要録・史籍)」にあたるものと容易に理解されるが、後半部分「紐察脱察安」は『元朝秘史』の表記としては極めて異例である。小沢重男(1994)で言及されているように、『華夷訳語』や『元朝秘史』の通常の表記としては「你兀察脱^𠃉赤顔」であることが期待される。にもかかわらずここに「紐察脱察安」という表記が現れるのはなぜか。

これについて小沢(1994)では「你兀^𠃉」>「紐^𠃉」という音変化(収縮)を反映した表記であると説明されている。つまり「紐察」を「你兀察」の後身とする。しかしながら、同書の説くところでは、『元朝秘史』巻1・2の完成は洪武15年(1382)、巻3以降も洪武期(1398まで)には完成し、モンゴル語の仮題「忙^𠃉豁^𠃉倫^𠃉紐^𠃉察^𠃉脱^𠃉察^𠃉安」とその漢訳名「元朝秘史」はともに編纂の最終段階で付けられたという。この説に従えば、冒頭の「忙^𠃉豁^𠃉倫^𠃉紐^𠃉察^𠃉脱^𠃉察^𠃉安」の音訳は本文の音訳とは時間的に最長でも16年ほどの開きしかないことになり、本文最終巻とは同時期ということになる。このような短期

間に音変化が生じたと想定するのはやや説得力を欠く。

小沢氏を含めほとんどの研究者は「忙^ㄗ豁^ㄗ倫^ㄗ紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」の部分を本文の音訳と同質の表記と見なしているようである。そのため「脱^ㄗ察^ㄗ安」は本来「脱^ㄗ察^ㄗ安」であり、その小字「ㄗ」を誤脱したものと考えている。那珂通世『成吉思汗実録』に始まり、道潤梯歩『新訳簡注蒙古秘史』、そして額爾登泰と烏雲達賽の『蒙古秘史校勘本』など、いずれも小字「ㄗ」を補うべきものとしている。

私見によれば、「紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」は伝統的な表記に従ったものであって、小字「ㄗ」は最初から記されていなかったと思われる。『至元訳語』で「ayula(山)」が「奥刺」、
「sigür(箬籬)」が「秀兒」と記されるように、「niyuča」が伝統表記で「紐^ㄗ察^ㄗ」と記されるのは何ら怪しむに足りない。この解釈に立てば、ごく短期間に音変化が生じたという無理な想定は必要ない。それでは、「忙^ㄗ豁^ㄗ倫^ㄗ」という精密表記に「紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」という伝統表記が接続するという、木に竹を接いだような表記はいかにして生まれたのであろうか。

あくまでも想像の域を越えないが、私は次のように考える。元代のモンゴル宮廷に秘蔵されたこの書は「niyuča tobčiyān」ないし単に「tobčiyān」と俗称されていた。そして膨大なその（ウイグル文字による）写本を収めた木箱の表面にはその俗称がウイグル文字と漢字の両様で記されていた。その漢字が「紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」である。したがって本文の漢字音訳がなされる以前から、伝統表記による俗称の「紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」が存在していた。明代になってこの書の漢語書名をつける際に、まず「紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」を訳して「秘史」としたが、それだけではモンゴルの歴史であることが不明瞭であることから新たに「元朝」の2文字を加えた。ここに漢語名「元朝秘史」が生まれた。さらに旧来のモンゴル語名「紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」を添える際に漢語名「元朝秘史」に合わせて「元朝」の部分のモンゴル語訳「忙^ㄗ豁^ㄗ倫^ㄗ」を新たに付け足した。こうして現行のモンゴル語名「忙^ㄗ豁^ㄗ倫^ㄗ紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」が誕生した。この流れを簡単に示せば次のようになる。

「紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」(元代)→「秘史」(明初)

→「元朝秘史」(明初)→「忙^ㄗ豁^ㄗ倫^ㄗ紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」(明初)

「紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」の部分の伝統表記で、「忙^ㄗ豁^ㄗ倫^ㄗ」の部分の精密表記であるのは、このような事情によるのであろう。もしも「紐^ㄗ察^ㄗ脱^ㄗ察^ㄗ安」の部分の明洪武年間に作られたならば、必ずや「你兀察脱^ㄗ赤顔」と記されたに違いない。「你兀一」は実際に本文に見える表記であるし、「脱^ㄗ赤顔」の表記が『元史』に見えることはすでに述べた通りである。

<参考文献>

小沢重男(1994)『元朝秘史』、岩波新書。

栗林均(2003)『華夷訳語(甲種本)モンゴル語全単語・語尾索引』、東北大学東北アジア研究センター。

陳垣(1934)『元秘史訳音用字攷』

中村雅之(2003)「中期蒙古語の音節末[-l]の音訳漢字」『KOTONOHA』第6号

吉池孝一(1993)「蒙古字韻の元刊本と乾隆写本」『中国語学』第240号

吉池孝一(1996)「中世蒙古語の漢字音訳と蒙古字韻総括変化之図」『日本モンゴル学会紀要』第27号